

祈りと召命に関する調査

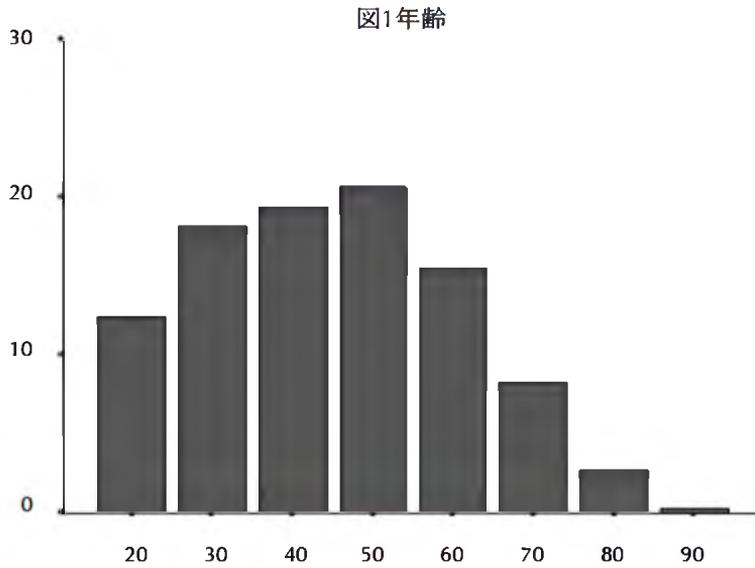
ロバート・キサラ

Robert KISALA

1996年6月、カトリックの名古屋教区信徒協議会女性部は、祈りと司祭職への召命に対する態度に関する教区の女性信徒の調査を企画実施することに協力を求めた。調査の目的は、司牧上の計画を援助すること、とりわけ、祈りと召命の促進との間に肯定的なつながりが確立され得るかどうかを客観的に探求することであった。まず、信徒協議会女性部の幹部が調査項目を立案し、次に、それは小教区の代表者と教区の司教と本論の著者の話し合いで改訂された。調査事項は21項目からなり、10月中に教区の全カトリック女性に送り届けられた。その調査のために全般的なサンプルが採用され、教区に登録されている20歳以上の全女性信徒に届けられるように配慮された。配布された質問紙の総数は約1万部にのぼった。各質問紙には、記入済みの質問紙を地元の教会に置かれた応答箱に入れるか、受取人払いの郵便を差し出すようにという指示が書かれていた。3,276通の有効回答が得られたが、これは豊富な情報を得るのに十分なサンプル数であった。

名古屋教区のカトリック女性のプロフィール

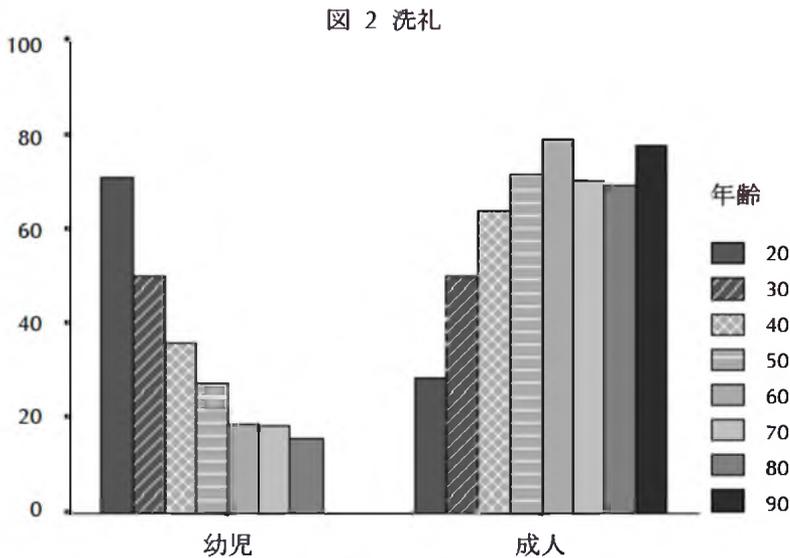
名古屋市とそれを取り巻く愛知県に加えて、名古屋教区は周辺の岐阜、福井、石川、富山の4県を包括する。回答者の大多数は名古屋地域の小教区から集まったが、名古屋市そのものからは41.7%、さらに、名古屋以外の愛知県の小教区からは30%であった。隣接する岐阜県からは、回答者の8.1%に当たる住民が答え、多い方から言えば、石川県（5.8%）、富山県（2.7%）、福井県（1.1%）の順



であった。

第1図に見られるように、教区の女性の年齢分布は非対称な釣鐘状のパターンを示している。重要なことに、回答者のほとんど3分の2 (60%) は30歳から60

歳の間であったが、この年齢層は、家族を育てているか、若年の成人の子どもを持っているかということが予想されるので、これらの人々の召命の促進に対する態度はとりわけ興味深いと言えよう。

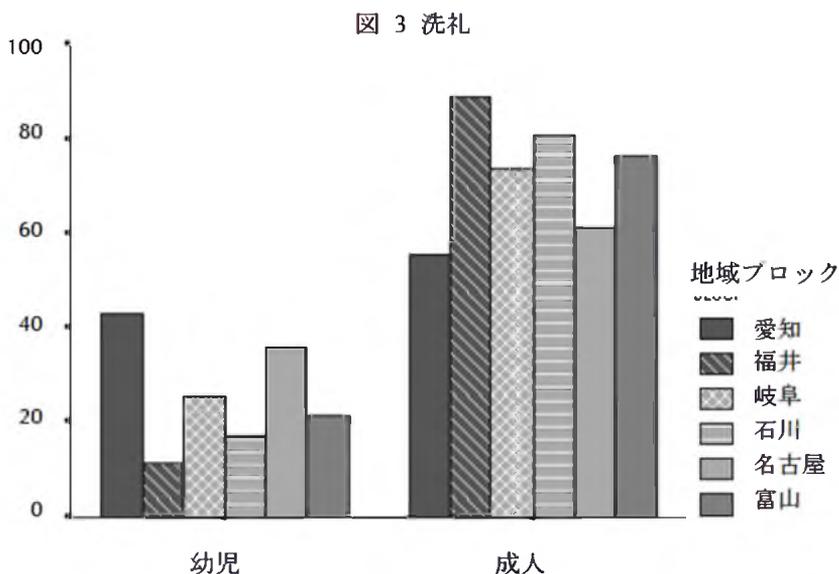


わずかに3分の1を上回る（36.3%）回答者が幼児洗礼を受けている。このことは、名古屋教区の教会がいまだに主として第1世代であり、カトリックの家庭を育てることよりもカトリックに回心することによってそのランクが上げられていることを示している。しかしながら、年齢別にみても、調査の結果は、このパターンが変化しつつあることを示している。図2が例証するように、回答者の年齢が減少するにつれて、幼児洗礼の数がコンスタントに増加している。このことが意味しているのは、より若いグループの成員の大多数が、主として第二第三世代のカトリックであり、近年、教会が回心よりも出産によって新たな成員を得ていることを表している可能性があり、実際、その傾向は加速している。¹

地域別の分析は、幼児洗礼に関してさらに興味深い事実を明らかにしている。名古屋市以外の愛知県のさまざまな教会

の回答者の43.8%もの人々が幼児洗礼を受けているが、この数値はどの地域ブロックと比較しても飛び抜けた高い数値である（図3）。この結果に対する一つの可能な説明は、愛知の産業界に雇用を求めて長崎や九州の他県から地域的な移住をしていることである。九州地方では比較的カトリシズムの影響力が強いことを考慮すると、その地域からのカトリックの移住者はおそらく幼児洗礼を受けている可能性が高いだろう。

成人の回心を促進する唯一もっとも重要な要因は婚姻のようである。幼児洗礼を受けていなかった人々が洗礼を受けた直接の理由を示すように訊ねられた場合、回答者の20%がカトリックとの婚姻に帰した。ほとんど同じくらい多くの回答者（19.6%）が広範囲の個人的な理由を挙げた。これらのなかでもっとも一般的な理由は家族の一員の影響（2.6%）である。それに続く理由は、多い順にあ



げれば、司祭や修道者の影響（16.7%）、人生に対する不安や苦悩（13.9%）、傑出したカトリック信徒との出会いなどである。いわゆるミッション・スクールへの出席は第5位であり、洗礼を受けた理由をこの影響に帰した回答者はわずか11%であった。若い生徒の回心を促すのにこれらの学校が有効かどうかという問いが生じてくるように思われる。なぜなら、ミッション・スクールの存続理由は一般にそこにあると考えられているからである。しかしながら、おそらく先に言及された洗礼を受ける決断に影響を与えた司祭や修道者の多くは、これらの学校に出席している際に会った人々だったのであろう。

回答者はまた家族構成に関して問われた。ほとんど3分の2は自分以外に2人から4人の家族と生活している。1人生活をしているのは6.4%だけであり、13.4%は5人以上の家族と生活している。家族の大きさに関する内訳は図4にみられる。

名古屋教区のカトリック女性でカトリックの夫と生活している者は、その3分の1をわずかに上回るだけであり、カトリックでない男性と結婚した者のうち30%近くが、そのことによって宗教的実践に問題が生じたことを指摘した。これらの異宗教間の結婚がどのような問題を引き起こしたかを特定するように問われたとき、ほとんど半数が、ミサに出席する問題を抱えていると述べ、さらに4分の1が、家族がいっしょに祈ることが困難な事実を指摘した。しかしながら、子どもの洗礼や宗教教育に問題を抱えていることを示したのは6.7%にすぎない。²

最後に、回答者といっしょに家庭で生活している受洗した子どもの数に関する結果について要約したい。家庭に受洗した息子が1人いるのは20%をわずかに越えるだけであり、7.5%は2人、1.7%は3人、0.1%は4人もっている。娘に関する結果も同様である。1人が19.8%、2人が

図 4 同居の家族数

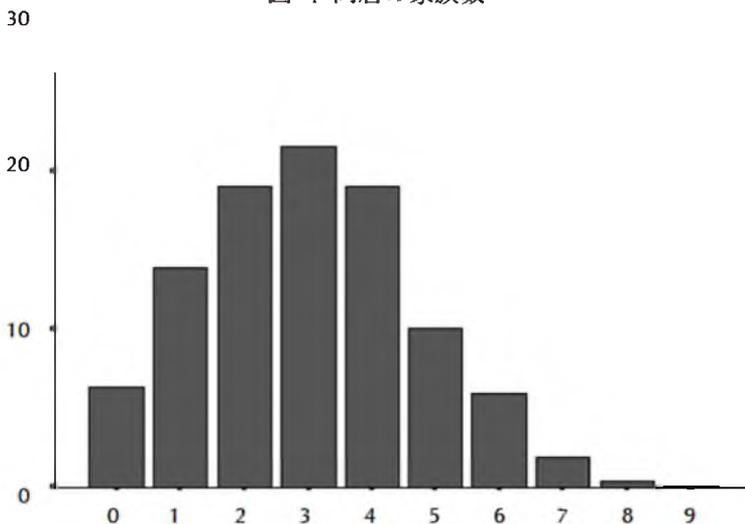


図 5 同居中のカトリック子供数

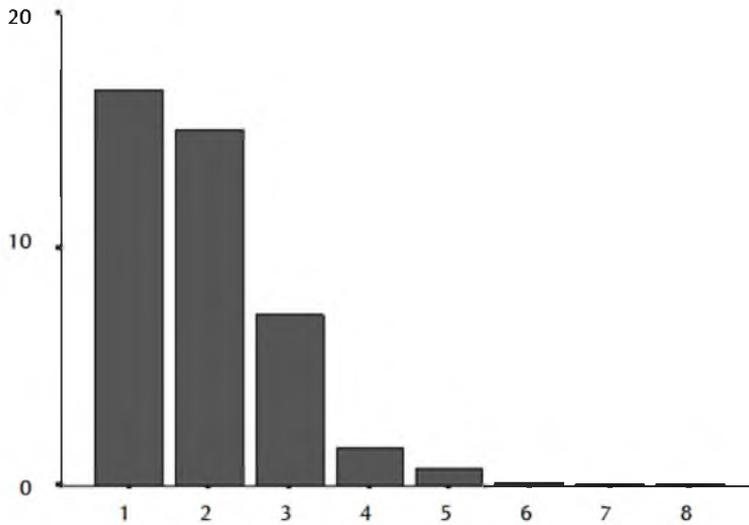
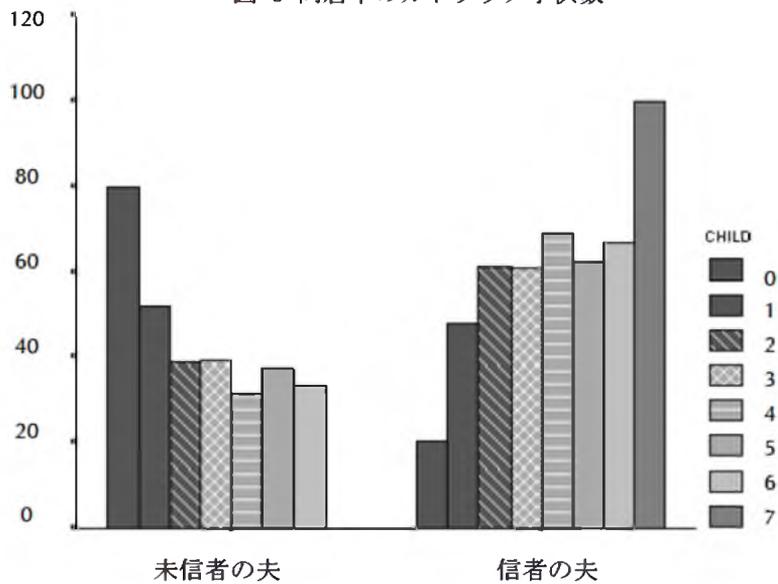


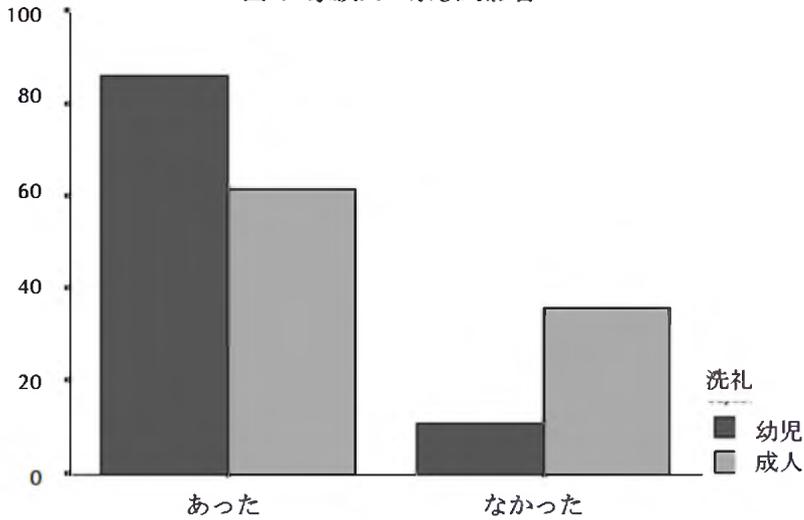
図 6 同居中のカトリック子供数



6.6%、3人が1.4%、4人が0.3%、5人が0.1%である。これらの数が家庭で生活しているカトリックの子どもの総数となり、その結果は図5のようになる。さら

に、図6に示されているように、夫もまたカトリックの洗礼を受けている場合には、より多くの子どもをもうける傾向があるようである。³

図 7 家族内の宗教的影響



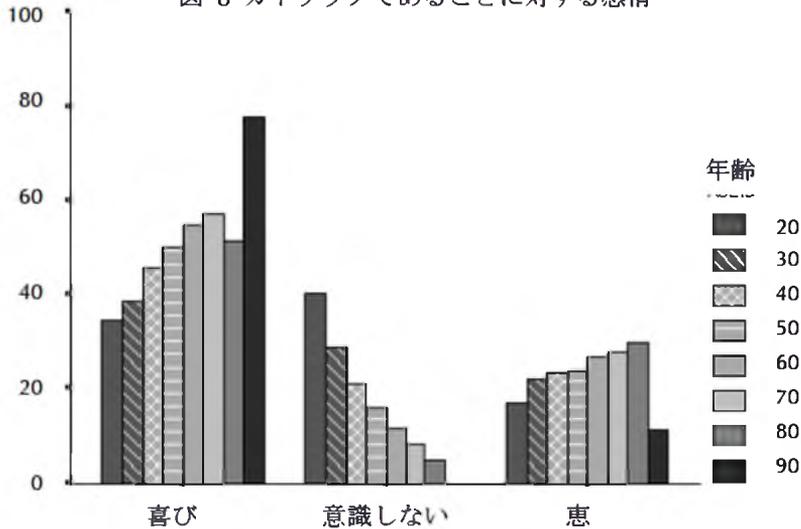
祈りに対する態度

祈りと祈りの実践に関する複数の質問が調査に入れられた。さらに回答者は、青年期の彼ら自身の宗教的影響、カトリックであることをめぐる感情、神のイメージに関して問われた。

ほとんど4分の3の回答者が、成長期に

家庭に宗教的影響があったことを証言した。図7が示しているように、幼児洗礼を受けたカトリックで、子どものときの宗教的な影響を認めている者の割合は比較的高いが、カトリック・ホーム以外の出身でも、まるまる60%もの人々がそのような影響を経験している。しかしながら、今家族といっしょに祈っていると答

図 8 カトリックであることに対する感情



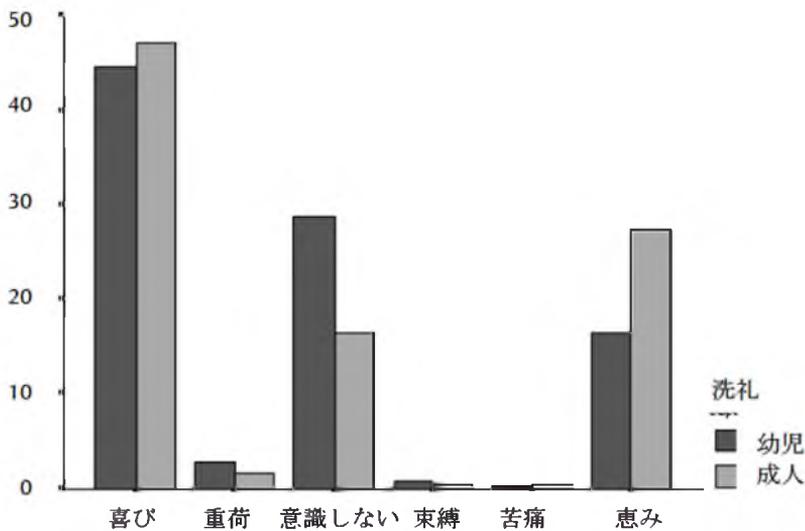
えたのは、25%にすぎない。この数値はカトリックの夫の存在に大きく影響され、その場合には40%に跳ね上がるが、回答者の子どもが今日家庭で何らかの宗教的影響を受けているとすれば、それは共同の祈り以外によってであろう。

調査回答者はカトリックであることに圧倒的に好意的であった。46%はカトリックであることが喜びの源であると述べ、さらに23%はそれが恵みであると述

る。これは若年層になればなるほど増加する答えである（図8）。自覚の欠如はまた、幼児洗礼を受けた人々の間にも比較的高いが、他方、後年洗礼を受けた人々の間では、カトリックであることが恵みであるという感情が比較的高い（図9）。

神のイメージもまた、回答者の年齢にしたがって鋭く分かれるようである。アンケートには10の回答が用意されていたが、それらは、否定的もしくは厳格（何

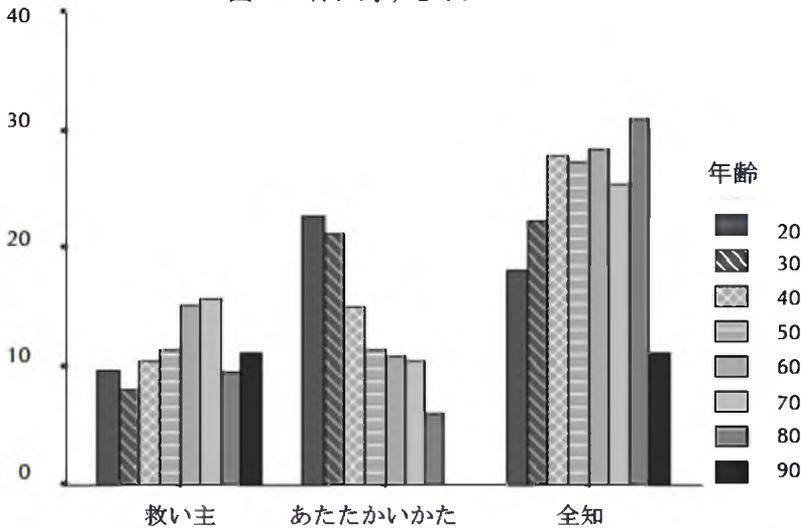
図9 カトリックであることに対する感情



べた。その評価が批判的であったのは3%以下にすぎなかった。2%はそれが重荷であると述べ、0.5%はそれが彼らを制約していると指摘し、それが苦痛のもとであるとした者はほぼ同数であった。しかしながら、興味深いことに、5分の1以上の人々が、概して自分がカトリックであることを意識していないと述べてい

となく遠くて近づき難い方、審判者)、家族的(父、母)、教理的(救い主、全知)、物理的に近い(身近な方、いつも側にいてくださる方)、「あたたかい」(祝福的、見えないけれどあたたかい方)に分類され得る。否定的イメージを選択したのは少数の回答者(4.6%)にすぎず、家族的なイメージもだいたい無

図 10 神に対するイメージ

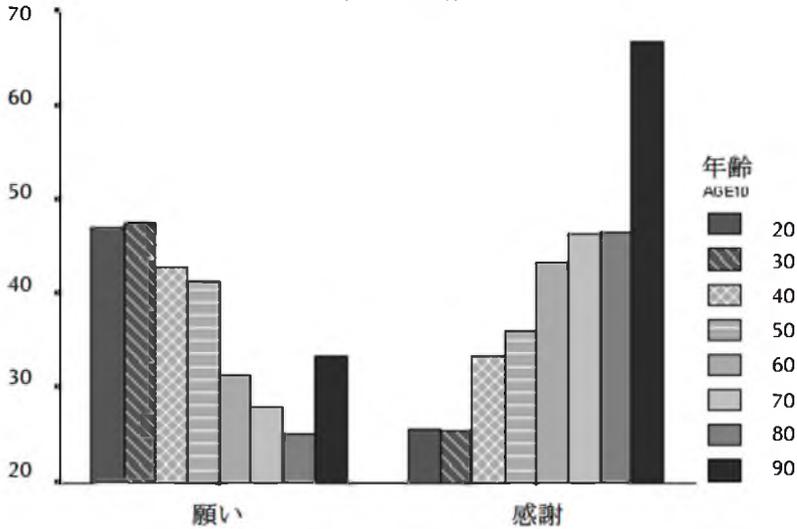


視された（父＝1.6％、母＝0.5％）。⁴ かなりの数が教理的なイメージを選択したが（全知＝26.6％、救い主＝11.3％）、4分の1以上の回答者が近い神のイメージ（いつも側にいてくださる方＝25.2％、身近な方＝1.6％）を抱き、5分の1が「あたたかい」イメージ（見えないけれどあたたかい方＝14.8％、祝福的＝6％）を抱いていた。図10にみられるように、教理的なイメージと「あたたかい」イメージの分かれ目は、年齢によって決まる。全知と救い主という二つの教理的なイメージが回答者の年齢とともに一般的に人気が高まるが、広範な「あたたかい」イメージは明らかに、信徒が若ければ若いほど人気が高まる。

調査に取り入れられた3つの質問は回答者の祈りに対するイメージを探求するために考案された。一つは概念的連想、一つは祈りに対する感情、最後の一つは祈りの定義に関する質問であった。概念

的な連想に関する問いには11の選択肢が提供されたが、これもまた、慰め（逃れ場、心の安らぎ）、罪悪感（義務、怠慢、自責感）、放逐（時間の無駄、不信心）、コミュニケーション（神との語り、神さまとの親しい対話）、制度的共同体的（司祭、ミサ）に分類される。われわれが神のイメージに関してみたことと同様に、祈りと関連した概念に対して公然と否定的であった回答者は少ししかない。11％が罪悪感（義務＝9.3％、怠慢＝0.6％、自責感＝1.2％）と関連づけたが、祈りを退けた者（時間の無駄＝0.1％、不信心＝0.8％）は1％に満たなかった。制度的共同体的な概念はあまりアピールしなかった（司祭＝0.8％、ミサ＝6.8％）。4分の1以上が逃れ場（4.7％）と心の安らぎ（22.7％）という慰めの概念を選択したが、明白な多数がコミュニケーション（神との語り＝44.6％、神さまとの親しい対話＝5.7％）と祈りを

図 11 祈りの動機

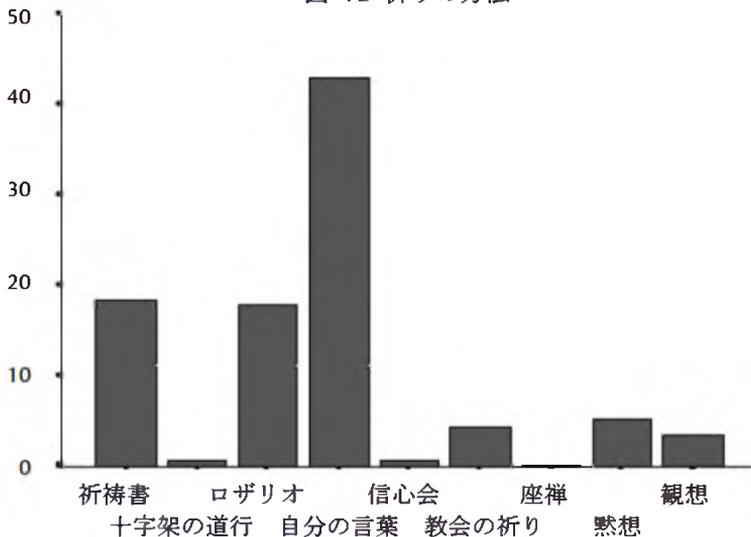


結びつけた。

祈りに対する感情に関して言えば、「プレッシャー(威圧感)を感じる」(2.1%)、「力のないもの、空しいものと感じる」(0.5%)、「難しいものと感じる」(3.5%)という否定的な答えを選んだ者は、ごく

わずかな割合にとどまった。半数を多少越える人々が祈りの重要性を認め、17.7%が「なくてはならないものと感じる」と述べ、さらに、33.8%が「大切なことと感じる」と主張した。唯一もっとも人気のある答えは、「いやされると感

図 12 祈りの方法

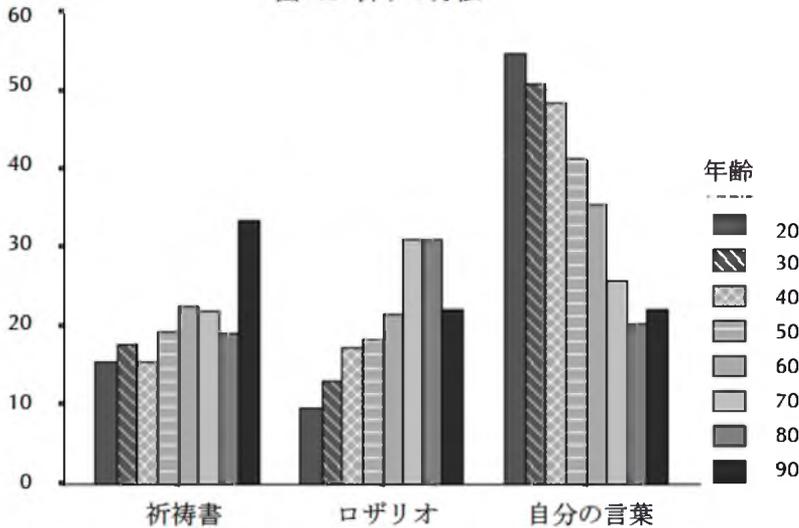


じる」であり、調査対象の女性の36.3%が選択した。

上の二つの問いによって示された祈りに関する圧倒的に肯定的なイメージは、回答者が提供した定義によって強化される。半数以上が祈りとは「神との自由な対話である」としたが、これは明らかに最近の信者入門によって促進された定義である。さらに、回答者の4分の1は「神の前にたたずむことである」としたが、

上がってくる。回答者は最近行った祈りに対して、願い、許し、感謝、賛美、嘆きという5つの伝統的な動機づけを選択肢として与えられた。願い（39.8%）と感謝（34.6%）が圧倒的に好まれていて、それに続いて許し（9.1%）と賛美（3%）と嘆き（1.2%）が挙げられた。願いと感謝に置かれた重要性は年齢によって逆比例した。願いが若者にとってより重要であったのに対して年長者にとっては感

図 13 祈りの方法



他方で、それが義務であるとしたのは10%にすぎず、2%以下のものが「定められた祈祷文を唱えることである」とした。

祈りが「信者の義務」とするのは75歳以上の信徒の間ではもっとも人気があったが、以上の答えは他には年齢層によってはあまりちがいが明らかにならなかった。しかしながら、祈りの動機づけの問題になると年齢が再び要因として浮かび

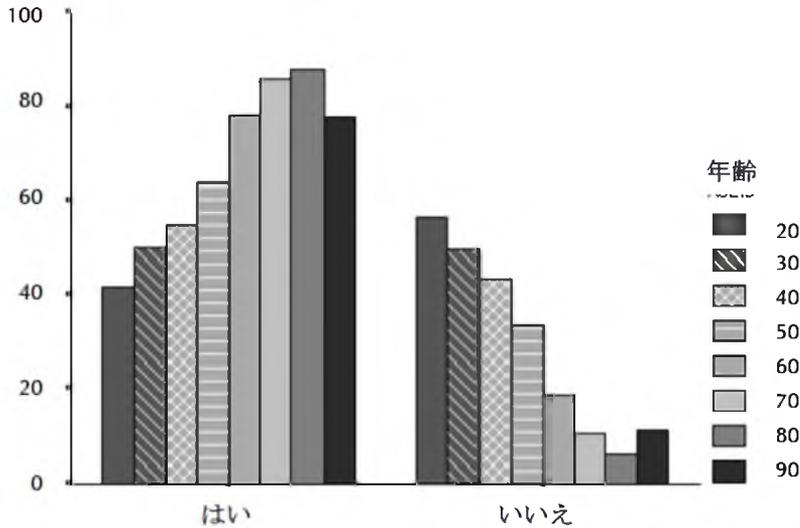
謝の方に重きが置かれていた（図11）。

好みの祈り方は、回答者の年齢に対する同様の依存を表している。調査は9つの選択肢を提供し、図12のような結果となった。「自分自身の言葉で祈る」のが全般的にもっとも人気があり、回答者の43%によって選ばれた。これに続くのがもっと伝統的な手法であり、「カトリックの祈祷書や他の祈祷文を使う」（18.4%）か「ロザリオ」（17.9%）で

あった。若者の間でこれらの伝統的な方法の人気が低下していることが予測されたが、結果はおそらく予測以上に劇的であり、年長の信徒に比べて20代の女性の場合、ロザリオの使用は3分の2に低下し、型通りの祈りの場合には4分の1に低下した（図13）。

約3分の1は、いそがしすぎるとか、世俗的な事物に圧倒されていたという事実を挙げた。しかしながら、この年齢層には幼児洗礼の者が多く、信徒としての自覚のレベルがおそらく低いことを考えると、この傾向は検討される必要がある。

図 14 最近祈っているかどうか

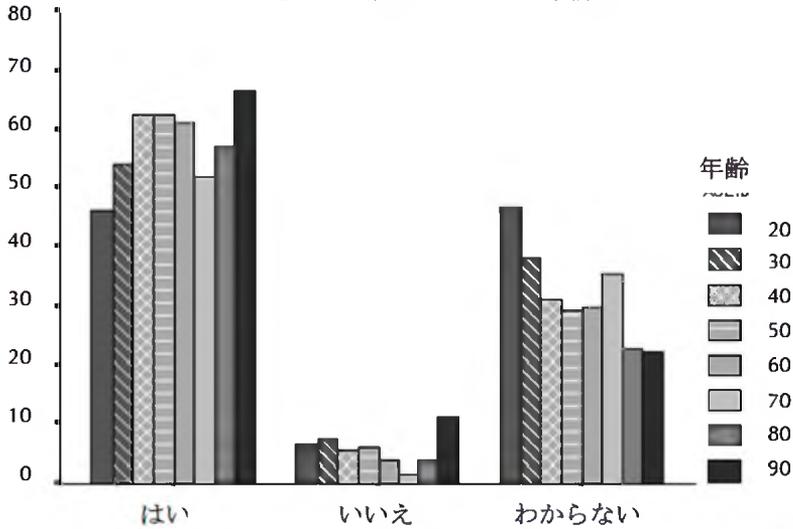


最終的には、回答者が最近祈っていると感じているかどうかを質問された。60%以上が肯定的な答えを出したが、ここでふたたび年齢の内訳をみると、若者の間に祈り離れの傾向が明らかになる。20代の女性信徒の60%に近くが最近祈っていないと述べているが、その割合は年齢層が上がるにしたがってだんだん減少し、80歳以上の人々の場合には5%となっている（図14）。この傾向の主な理由は、若い女性に対して不釣り合いなほど子育てや仕事の負担がかかっていることかもしれない。実際、最近祈っていないことの原因を尋ねられたとき、回答者の

司祭職への召命に対する態度

祈りに加えて、この調査の第二の主要な関心事は、司祭職への召命に対するカトリック女性の態度であった。この調査を企画した女性たちが特に関心を抱いていたのは、回答者が、息子たちの間にそのような召命を促進したり指示したりする傾向があるかないか、また、これらの態度が先に探求された祈りに対する態度によって影響されているかいないかということであった。この目的のために、召命に関する3つの問いが調査に含まれていた。回答者は、司祭になることに興味

図 15 息子が司祭になることに賛成か

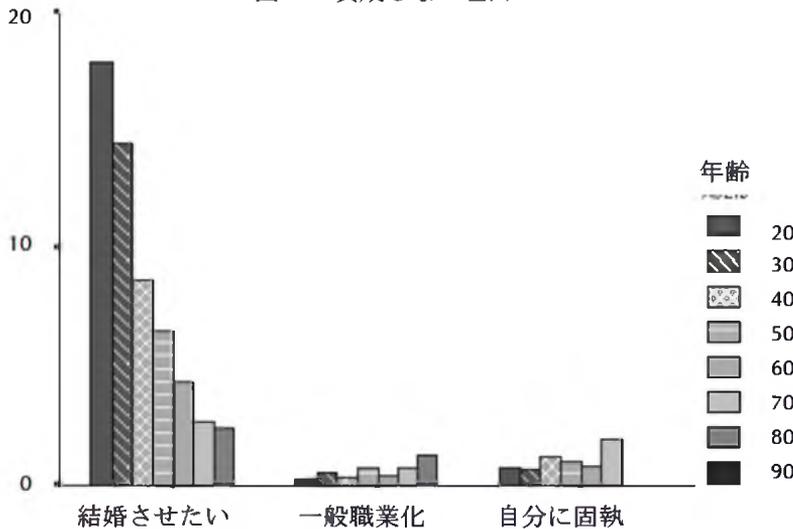


を示した息子を自分が支持するかどうかを最初に問われた。指示したり反対したりすることの理由が次の問いの主題であった。

明らかに過半数を占める回答者の57%が、司祭になりたいと思った息子を支持

すると述べ、わずか5.3%が明確に反対すると述べた。しかしながら、回答者のまるまる3分の1は、わからないという幾分否定的な回答を選んだ。さらに、若い信徒の間には肯定的な答えから離れる明らかな傾向が指摘できる。20代の女性の

図 16 賛成しない理由



50%以上が幾分否定的であったのに対して、50代の女性の場合には30%以下であった(図15)。この傾向は60代、70代の集団では逆転するが、その理由はすぐ後にみるように全く異なっている。

司祭職に関心を示した息子を支持するかどうかという問いに肯定的な答えを出した人々に対しては、さらにその支持の理由が尋ねられた。30%は伝統的な召命の見解を代弁して、息子のなかに神の呼びかけが働いていることに対する答えとして支持する(「子供の心に働かれた神さまの望みに応えたい」と述べた。さらに、そのような支持が神に対する奉獻であると考え(「自分の一番大切なものを神さまに捧げたい」と述べた者が7%おり、教会が司祭(「司祭は教会の方だから」)(3.2%)とりわけ邦人司祭(「邦人司祭の誕生を希望して」)(1.6%)を必要としていることに基づいた理由を挙げた者が5%いた。自分が個人的に出会った司祭に深い印象を受けたという事実(「今までに出会った司祭の姿にうたれて」)を理由として挙げた者は4%に満たなかった。息子の願望の尊重(「本人の意思を大切に(尊重)して」)は飛び抜けて最も重要な理由として挙げられ、半数以上(53%)がその理由を選んだ。これらの回答にも年齢が一つの要因として働いていて、60代以下の女性は、一般的に召命に対する伝統的な見解や教会の必要よりも個人的な選択を重視している。

息子の人生の個人的選択に対する傾向は、司祭になると表明された願望に反対する理由にもみられる。ここでは、11の

選択肢が与えられ、それらは、個人的関心もしくは家族の関心、教会に対する否定的態度、今日の司祭職に対する否定的態度というカテゴリーに分類される。後者2つの回答は少なかったが、もっとも重要な関心事は個人や家族の事柄と関わっていた。これらのうち、他のすべてを圧倒しているのは、息子に結婚生活を体験させたいという願望であり、この問いに対する回答者の4分の1がこの答えを選んだ。この理由は20代の人々の間でとりわけ強く、図16が示しているように年齢との強い相関関係を表している。興味深いことに、今日の司祭職に対する否定的なイメージ——司祭職も一つの職業にすぎなくなっているとか、司祭が他者を援助するよりも今や自分の生活にもっと関心を持っているといったもの——は、60代以上の間で比較的強い役割を果たしているように思われる。

祈りと、教会における司牧職の召命の未来

調査の結果は、祈りに対する態度、祈りの実践、神のイメージといったものが、司祭職に対する召命の促進に向かう態度と明らかな相関関係をもっていることを示している。最近祈ったり家族とともに祈ったりする人々は、司祭職の召命に対して全般に比較的好意的であり、カトリックであることに肯定的な感情を抱いている人々は、召命に対して比較的好意的な傾向がある。さらに、祈りが必要不可欠ないし重要であると述べた人々は、息子の召命の可能性を支持したいと思っている。これらの結果は期待された

ものであった。なぜなら、祈りに対する肯定的な態度と祈りの実践に向かう気質は、宗教活動に全般的な関心があることを示しているだろうし、さらにそのことは召命の促進を支持する可能性があるからである。神のイメージに関わる結果は雑多であった。救い主と全知という伝統的なイメージを採用した人々は召命を支持する方であったが、その態度は、否定的ないし厳格な——にもかかわらず伝統的な——イメージ、つまり審判者を選んだ人々もまた共有している態度であった。しかしながら、神の「あたたかい」イメージを持っていると公言している人々は概して召命に対して否定的であったが、これは若い信徒の間でこのイメージに人気が集まっていることを考えると教会にとっては困った傾向である。

表面的にみれば、名古屋のカトリック教会にとってこの調査の結果は励みとなると思われるだろう。圧倒的な回答者が信仰と祈りに対して肯定的な感情を示しているし、明らかに多数が定期的に祈りを実践しているし、司祭になるという願望を表明した息子を支持するだろう。自らの支持に対して何らかの疑念を表明した人々でさえ、教会や今日の司祭職に対して批判的でないことがわかる。他方、高齢の信者の間にはある程度までそのような否定的なイメージがあることは否定できない。しかしながら、とりわけ年齢層によってその結果をさらに分析してみると、召命の将来に関して警戒すべきであろう。

大人として個人的な決断の結果として教会員となった人々からよりもむしろ、

幼児洗礼を受けた人々から構成された教会に向かう明らかな傾向がみられる。これらの第二世代第三世代のカトリックは、信者としてのアイデンティティをあまり自覚していなくて、あまり祈りに従事していない傾向がみられるようである。後者は今日の社会的立場（仕事を持つ若い母親）の結果かもしれない——この件に関してはさらに長期的な調査で検討されなければならないだろう——が、アイデンティティの問題は、論理的に言えば、教会に足を踏み入れる仕方と直接結びついているであろうので、司牧の担い手として関心の的になりうる。それ以上に、これらの若い女性は、自らの母親よりも司祭職への召命に対してあまり支持をしない傾向にあるが、彼らがためらう理由は、主として聖職者の独身に関する教会の規則であるように思われる。どの世代の母親の場合でも、子供が結婚することはふつう好むと考えられるだろうが、宗教的な理由（天命や犠牲としての召命）や制度的な理由（司祭職に対する教会の必要）で他の選択肢を喜んで受け入れる意欲が減少しているように思われる。実際、家族における司祭の召命を支持することを表明した多数の間でも、支持の理由は圧倒的に、息子の個人的選択に対する尊重であり、このことは、宗教的関心や制度的関心よりも個人的な発達の方に重きが置かれていることを示している。

これらの結果は、制度的権威よりも個人的経験や成長を強調する、広範な宗教的趨勢——原理主義、ペンテコスト運動、ニューエイジ運動にみられるような

——の反映かもしれない。⁵ 包括的な「あたたかさ」という神のイメージは、若い信徒の間でとりわけ人気があるが、そのような不定型な概念が伝統的な教理的な定式よりも人気を博しているところをみると、今日の宗教観念の広範な影響のしるしとなっているかもしれない。もしその仮定が正しければ、次世代の信徒の必要によりよく応えられるように、司牧の担い手に対してこれらの広範な趨勢のを知るとともに——またキリスト教の福音にとつてのそれらの意義を振り返る——ように勤めることができるだろう。

註

1. 実際、この趨勢は教区によって提供された最近の洗礼式統計にみられる。1990年から1993年の間の幼児洗礼と成人洗礼は以下のように分かれる。

	幼児洗礼	成人洗礼
1990	315	252
1919	384	285
1992	374	271
1993	470	293

2. 回答者が順位づける機会が与えられたのは、ミサへの出席、教会活動への参加、家族での祈り、自らの宗教生活への障害、子どもの洗礼や宗教教育という5つの困難な領域であった。さらに、回答者は異宗教間の結婚によって引き起こされる他の困難について書き込む機会が与えられた。しかしながら、結果を分析したところ、複数回答をした多くの人々は、与えられた回答の順序を写したにすぎなかった。したがって、最高位の回答のみ挙げられた。

3. 回答者がカトリックの子どもの数に関してしか質問されなかったという事実によって、ここの数値が多少歪められているかもしれないが、一人の子どもが受洗していれば、家族内のすべての子どもが受洗するという傾向があると推定しても常軌を逸していることはないだろう。したがって、カトリックの夫のいる家庭では一人以上の子どもがいる場合すべての子どもが洗礼を受けているという数が多いという事実は、夫婦がカトリックの場合には子どもが多いことを示しているにちがいない。

4. 日本のカトリック作家、遠藤周作(1978)は、日本人の性格には父のイメージがそぐわず、育む母としての神と置き換えられるべきであると論じた。少なくとも日本の女性信徒の場合には、広範囲の選択肢があれば、どちらもあまり重要ではないようにみえるだろう。

5. これらの宗教的趨勢の特徴をめぐる報告に関してはたとえばキサラ(1996)を参照。

参考文献

ENDŌ Shūsaku
1978 *A Life of Jesus*, (Richard A. Schuchert, trans.), Tokyo: Charles E Tuttle.

キサラ・ロバート

1996 「ニューエイジ」、『日本の仏教』法蔵館 pp. 39-44.

ロバート・キサラ

本学文学部助教授・本研究第一種研究員

(訳 / 渡邊 学)